

## 2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>( 1 ) 施設果菜類の管理</p>	<p>( 今月の作業のポイント )</p> <p>施設果菜類の管理 露地野菜の管理 ハウスの雪害対策</p> <p>キュウリ、トマトなどの施設果菜類では、低温と日照不足により草勢が低下しやすく、着果負担が加わるとさらに草勢が低下しやすい。春先からの減収や品質低下を防ぐには、厳寒期の草勢管理が重要となる。</p> <p>ア 追肥・摘果 この時期は地温が低く、肥料の吸収も悪いため、一度に多量の追肥を行うと根傷みを起こす恐れがある。追肥は草勢を見ながら少量（窒素成分で1～2kg/10a程度）、多回数（間隔は約1週間）で施用することを基本とし、光合成が活発となる午前中に吸収されやすい肥料（液肥等）で灌水を兼ねて施用する。併せて、変形果を中心に摘果を行い、着果負担の軽減に努める。</p> <p>イ 採光の改善 果菜類の光飽和点（光合成量が飽和に達する時の光の強さ）は、キュウリが4～6万ルクス、トマトが7万ルクス、イチゴが2～3万ルクス程度であり、生育や収量の向上を図る上では、光飽和点近くの強い光が連続して当たることが望ましいが、この時期は日射量が少なく、日照時間も短いため、全般に光合成量が少なくなる。このため、光合成が盛んに行われる午前中はできるだけ内張りを開放し、ハウス内の採光に努める（写真2）。</p> <p>また、採光を改善すると地温も上昇するので、晴天の日では</p> <div data-bbox="911 571 1366 927" data-label="Image"> </div> <p>写真1 節間が詰まり着果位置の上昇したキュウリ</p> <div data-bbox="943 1361 1388 1691" data-label="Image"> </div> <p>写真2 内張りの開放と反射マルチを利用して光を多く取り入れる事例</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 露地野菜の管理</p>	<p>きるだけ朝早くから開放する。</p> <p>ウ 換気  低温期にはハウスを密閉することが多いため、光合成の盛んに行われる午前中は、ハウス内の炭酸ガス濃度が低下しやすく、光合成を行う上で制限要因となる。このため、晴天日の午前中は、短時間でも換気を行って外気を取り入れ、ハウス内の炭酸ガス濃度の低下を防ぐ。</p> <p>エ 病害対策  厳寒期のハウス栽培では、低温・多湿条件により灰色かび病が発生しやすいため注意が必要である。晴天日にはつとめてハウスの換気を行うとともに、花卉や発病葉、発病果等を除去し、適宜薬剤散布を行う。また、循環扇によるハウス内の空気の攪拌も、灰色かび病の発生抑制に有効とされている。</p> <p>ア トンネル栽培の温度管理  トンネル栽培では夜間の温度確保が困難なため、午後早めにトンネルを閉めて夜温を確保するが、穏やかな天気が続き、夜温が高い場合は、日中の換気を十分に行い、トンネル内の温度を低めに管理して軟弱徒長を防ぎ、耐寒性を高める。</p> <p>イ 施肥及び灌水  耐寒性は、植物体内の汁液濃度が高い方が強まるため、低温期に肥切れさせないことが大切である。特にキャベツなどの結球野菜では、外葉の形成期と結球期に養分吸収が最も盛んに行われるので、結球始期に窒素・加里をそれぞれの成分で5~6kg/10a程度施用する。灌水はやや控えめにして汁液濃度を高く保つが、葉の光沢が悪くなるほど水分が不足すると、収量や品質の低下を招くので、乾燥が続く場合は暖かい日を選び、午前中に灌水する。</p> <p>ウ ソラマメの誘引準備  ソラマメ栽培では、生産力の高い分枝を残し誘引していくことが高収量につながる。上旬~中旬に一株当たり5本程度の分枝を選び、それ以外の分枝は除去する。選定する分枝の基準は、昨年末までに発生したもの、大きく勢いのあるもの、誘引しやすい向きに伸びているものの3点である。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3)ハウスの雪害対策</p>	<p>分枝の発生が進むほど選定しにくくなるので、適期を逃がさないようにする。写真3はソラマメの分枝の整枝である。選定した分枝は、写真4のように一段目のひもに誘引し、伸長に合わせて二段目以降選定のひもを張っていく。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="477 524 912 853"> </div> <div data-bbox="927 524 1374 853"> </div> </div> <p>写真3 ソラマメの分枝の整枝      写真4 一段目の誘引例</p>
	<p>ア 雪害発生の要因</p> <p>本県で降る雪は、寒冷地に比べ湿雪であり、ビニールの表面にも付着しやすい。特に、南岸低気圧によって冬の終わりから春先にかけて降る雪は、積雪1cmで2~3kg/m<sup>2</sup>の重さとなる。また、パイプハウスは比較的屋根の勾配が緩やかなため、雪が滑り落ちにくく、一夜のうちに10~20cm以上の積雪があると、雪の重量でハウスが潰れやすい。また、比較的降雪量が少ない場合でも、風の影響で屋根の片方に集中的に積雪すると、ハウスのバランスが崩れて倒壊の恐れがある。</p> <p>イ 雪害対策</p> <p>積雪が予想される場合には、強風対策に準じ、筋交いや補強支柱等によりハウスの補強を行う(写真5)。</p> <p>暖房設備がある場合には内張りを開放し、設定温度を高めにして加温する。</p> <p>雪が止んだら、屋根上の積雪はできるだけ早く除雪する。特にビニールがたるみ、雪の滑落が進まない時は速やかに雪降ろしをする。</p> <p>強風対策と同様、施設各部の損傷や緩みの有無等を点検する。</p> <div style="text-align: right;"> <p>写真5 筋交いによる補強</p> </div>